



小兒手引







一 小児の生るハ子孫を授けの大神ト云々其の事ハ  
少児の生るハ子孫を授けの大神ト云々其の事ハ  
てり死し見世工のちも改也

一 小児記するハ多岐虫と云々此の代ハ来凡千五百  
年々の医書おあれ是レハ世の法方ハ仲氏ありて世の  
いの心なる遠くありて死すあり

一 小児の生るハ子孫を授けの大神ト云々其の事ハ  
少児の生るハ子孫を授けの大神ト云々其の事ハ  
てり死し見世工のちも改也









つ若のこをあつくる虫おぼして見——虫の心こは

あ虫ち——是れ虫の多るあるを

蛇虫は滑ておもてハ尼くすをくたるる虫のちこ

あしてこれつゆのてさる虫おぼしてさるる虫のちこ

おし世目なるてお物もつりくちる虫のちこ

く物さうてさる虫滑てさるる虫のちこ

く物さうてさる虫滑てさるる虫のちこ

つ子面を向してさる——く

一せらるる虫をさしては腹は虫滑てさるる虫のちこ

て物はさうおぼやたる虫のちこ

こらつるる虫くくはれやも死する虫のちこ

て腹はさうさるる虫のちこ

して口鼻さうある虫のちこ

萬鳥回音日











お死生之仍る事亦るおしえし一して縁跡虫おるが  
子に底あてす 云底世の畏するは 伏おる子しむ信て  
ちある命

水次ニ中見をすし 産汗おるししむ

一その見をすし せいもせもあつちのいんしんしん  
のていあをせの命あつちし 進雲湯おるししむ  
ちいかりしし 命のちいさのちいさのちいさのちいさの

秋あつちの命あつちし 産ハ虫しし ちいさの命しし  
虫湯ニやらし

### 進雲湯

海人州 あつちの命あつちし 苦練根皮 あつちの命あつちし  
陳皮 あつちの命あつちし 枳椇 あつちの命あつちし 枳椇 あつちの命あつちし  
枳椇 あつちの命あつちし 枳椇 あつちの命あつちし 枳椇 あつちの命あつちし  
右に通あて せし ちち





一 本草元來虫をとりあのむくまは流るるなり

少兒と縁もちいて虫あれたるに痛あてしす痛あてり

て夜見おもちいてあく使すあくえく見らるるなり

一 海人竹ハ心とくおきし痛の虫をとりと竹のり

苦練根皮よく虫を逐え氣を治す棋師子病おきり

虫をとり陳皮半夏茯苓ニくしやうして瘧の

くすりて白木もいひのちやうの湯おやむ別六君子

湯も右何もあつては茶也医原道あつてあつてす

あそきりあくもちやうなり

右通おれくもちいて痛あてしあつてあつてす

腹おえて虫湧くを甜作しぬ

一 小兒腹虫湧て何るや、是おんちハ子供よを挿入する時

何れのけしして何れおれをさしては虫先すて下

腹おえてあつてえりし虫下何れをそのあつてくれ









婦らもゆせ〇ちいあをなが食する〇いちけにける  
 一 腹のこまきせしあるしを多吐〇小便せしと教う  
 あるは虫食ふしとせしを小便せしと成是ハ所の  
 くすしにてハさつす 逆虫湯おもちいてしと成  
 一 腹をくくしつあする〇さしのをれらひら  
 一 物へ腹いしむ有しとすハ虫にてあし  
 亦兼二方しくすしもちい白く大彼うし虫をゆき成

子者の要するハ方候し子治し

一 せし子者の要するしつすらしてニ之米成又ハ七八月  
 して死白塔虫湯でそれし知あおもてハんくく高毒のく  
 すしお用て痛のわお治し不腹の円せうのする由のあ左不也  
 一 死すしあるを 是食の食うて由し又ハお屋の  
 ぬの血のこまきせし 熱のさしよを 腹中のくせ  
 有しハニ之ちこぬを物虫にて病氣と成てハ虫あをらし





















一ツと心より氣痛く云々、<sup>體</sup>痛五臟の<sup>後</sup>と云々、<sup>八</sup>虫積

を吐沃あもて、<sup>能</sup>不むつか

一痛は<sup>け</sup>りれてあこも病<sup>之</sup>故<sup>なり</sup>、<sup>考</sup>と書入〇<sup>心</sup>あり

云々十七<sup>市</sup>未<sup>心</sup>氣<sup>の</sup>や<sup>ん</sup>の<sup>は</sup>ま<sup>せ</sup>上<sup>より</sup>も<sup>り</sup>れ

さる<sup>ふ</sup>い<sup>さ</sup>の<sup>く</sup>、<sup>登</sup>明<sup>之</sup>甘<sup>味</sup>之<sup>中</sup>に<sup>知</sup>思<sup>お</sup>あ<sup>り</sup>

人<sup>の</sup>す<sup>く</sup>れて<sup>せ</sup>ら<sup>あ</sup>つ<sup>た</sup>、<sup>九</sup>十<sup>七</sup>の<sup>心</sup>記<sup>を</sup>

白<sup>す</sup>あ<sup>も</sup>す<sup>く</sup>、<sup>十</sup>中<sup>の</sup>一<sup>を</sup>、<sup>月</sup>日<sup>あ</sup>り

ては<sup>も</sup>り<sup>く</sup>て<sup>文</sup>脈<sup>の</sup>い<sup>く</sup>、<sup>文</sup>脈<sup>の</sup>い<sup>く</sup>と<sup>成</sup>て<sup>何</sup>も<sup>知</sup>

と<sup>干</sup>氣<sup>と</sup>取<sup>て</sup>、<sup>神</sup>の<sup>せ</sup>す<sup>に</sup>、<sup>考</sup>も<sup>あ</sup>り<sup>く</sup>、<sup>病</sup>

と<sup>成</sup>又<sup>向</sup>、<sup>中</sup>の<sup>一</sup>、<sup>考</sup>も<sup>あ</sup>り<sup>く</sup>、<sup>病</sup>

り<sup>在</sup>、<sup>考</sup>も<sup>あ</sup>り<sup>く</sup>、<sup>病</sup>

あ<sup>り</sup>、<sup>考</sup>も<sup>あ</sup>り<sup>く</sup>、<sup>病</sup>

血<sup>の</sup>、<sup>考</sup>も<sup>あ</sup>り<sup>く</sup>、<sup>病</sup>

葉<sup>の</sup>、<sup>考</sup>も<sup>あ</sup>り<sup>く</sup>、<sup>病</sup>

















心腹に物を食うやむるを——やうく腹をんて虫  
 ころけおされむか——身死ともあはれ——想しむる病  
 とるを偏氣の類ハ虫の滑くること————  
 しく——  
 考ふ途にやうく成さくを——く海へん ○錦裏疔と  
 い秘録に曰くさゆのあり——ハ二ツハ蟲を殺二ツハ元  
 氣を害すやむる道に作の曰宿瘡ハ唯虫を殺——とを

故に男女老幼前後母——病を申ハ是を虫積疔と  
 名附るく治すの法是道く先——して是を——  
 一男女老幼前後瘡——食の洞あ——くやう——又稱  
 して瘡虫滑すやう初治て又腸の腹を好す也や  
 ことる面——氣動つ——成又虫腸胃を好すけらや  
 不食と成すやむる又瘡同——瘡を——呼吸せしむるせ





可也きうう咳と名附あつめく心好又ハ氣痛とる  
 てあふふせうと氣とをくハ氣とあくをすきて  
 くる一丸あつて痛の去と成虫と去のく作あき更よ  
 葉海草のいゝとる一箇一箇久一々作す故也  
 せあはくはハ心久カキ一と神薬と白とあきりあ  
 う是又神薬ハ深薬と成て害くあき神不虫ハ候  
 くと痛痛ハあひつて物を收氣せしめはち成

我病人心下とあきとてさくくはる人  
 一とさくくはる初冬にさつさくはるて百さく人となん  
 るさくくはる初冬にさくくはるて百さく人となん  
 一とさくくはる初冬にさくくはるて百さく人となん

消蟲湯

便子搗目 栝子搗目 五苓 苦練根皮 せんは  
 元用搗目五分





右通水てきしつゝいふいふ蓄會の紛域同

奏ふれてもさゆわれ、木くすやあるあり

右通二腹もさゆて右通虫湯をついて

とふまゝ〇遠蟲湯

一海人竹根丸五分せしつゝ元同苦練根皮楸同四分せし

六右同換昂子楸同四分百粒根楸同二分陳皮楸同

芬羊身楸同二分夜苓楸同二分黃連楸同二分

楸同二分右通水てきしつゝ右消虫湯を二腹もちいて

右通虫湯をついてもさゆて右通水てきしつゝ

さゆてきしつゝいふいふの病人もさゆて

さゆてきしつゝ

一女子同すゝすゝすゝすゝすゝすゝすゝすゝ

二唇うり食つ初あ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

右通水てきしつゝいふいふの病人もさゆて









薬せん

一 惣して薬をせよ。さるる薬、袋に入れていれ。さるる水  
さるる薬をせよ。いれてせよ。

一 市に近き人、十の月、世に女氣也。さるる不食、て薬をいつる。  
くさるる、さるるむさるる、医序の薬をいつて、治せよ。ふ  
さるる、さるる、市に云、是、全、蛇虫の、さるる、さるる、さ  
すめて、遠虫湯、さるる、さるる、大、彼、さるる、さるる、て、食、ま、さ

心よく、或、〇、又、十、二、月の、男子、さるる、一、病、病、の、て、い、れ、さ、り  
さるる、不、食、て、さ、せ、さ、るる、親、の、云、服、を、見、て、さ、れ、さ、るる、さ、るる  
て、腹、不、足、さ、るる、心、の、さ、るる、さ、るる、さ、るる、さ、るる、是、蛇、虫、湯、を、て  
虫、の、り、さ、るる、さ、るる、仍、ら、姪、消、虫、湯、を、二、袋、の、さ、るる、い、れ、さ、るる、遠  
虫、湯、を、さ、るる、い、れ、さ、るる、さ、るる、虫、の、さ、るる、り、さ、るる、食、ま、さ、るる、さ、るる、さ、るる、さ、るる  
成、心、さ、るる、さ、るる、一、惣、虫、湯、を、焼、け、り、さ、るる、さ、るる、初、症、を、い、れ、さ、るる、  
さ、るる、さ、るる、物、を、さ、るる、さ、るる、さ、るる、死、す、さ、るる、さ、るる、月、日、治、す、さ、るる、

















30

二やく、面と云は中風やしてりやうしてハチ  
 かんと古人のわくは何れもあつてもりやう作あもと見  
 らるり作人〇率中風ハ率ハ昏あつて倒り  
 云是ハ全瘧のそ成り明白也

一醫書曰凡率中風昏倒不醒不首人事此中  
 風瘧之中風瘧厥昏迷率倒不首人事

風中血飢四肢不舉口不能言及瘧迷心竅不首  
 人事一是之知一瘧心けり迷て多成て胸

満浴て呼吸し手とわある故ニ夢中ニ成て死す可れ  
 ハ少く浴て瘧を去用心をすれば亦あくのふい  
 瘧瘧一時めりふるハ何れすの瘧て瘧瘧て心  
 何れと恍惚々々て用心ありて目と瘧多成  
 て老よりそ瘧々々瘧の極つれて多ありて胸膈  
 満てふらふくあるハ瘧のたおんて集水









二思入を閉て命の氣を火の氣に引きて



又思入を閉て命の氣を火の氣に引きて  
海の中に入りて命の氣を火の氣に引きて

の血を各々を火の氣に引きて  
之を命の氣に引きて  
命の氣を火の氣に引きて  
命の氣を火の氣に引きて  
命の氣を火の氣に引きて

又命の氣を火の氣に引きて  
命の氣を火の氣に引きて  
命の氣を火の氣に引きて  
命の氣を火の氣に引きて  
命の氣を火の氣に引きて

命の氣を火の氣に引きて  
命の氣を火の氣に引きて  
命の氣を火の氣に引きて  
命の氣を火の氣に引きて  
命の氣を火の氣に引きて





又の氣を令て瘧の瘧を治すは肩脊を冷せぬことなる  
 瘧の瘧を治すは肩脊を冷せぬことなる  
 瘧の瘧を治すは肩脊を冷せぬことなる  
 瘧の瘧を治すは肩脊を冷せぬことなる

瘧の瘧を治すは肩脊を冷せぬことなる

瘧の瘧を治すは肩脊を冷せぬことなる

瘧の瘧を治すは肩脊を冷せぬことなる

瘧の瘧を治すは肩脊を冷せぬことなる

瘧の瘧を治すは肩脊を冷せぬことなる

瘧の瘧を治すは肩脊を冷せぬことなる

瘧の瘧を治すは肩脊を冷せぬことなる

瘧の瘧を治すは肩脊を冷せぬことなる

瘧の瘧を治すは肩脊を冷せぬことなる

瘧の瘧を治すは肩脊を冷せぬことなる

瘧の瘧を治すは肩脊を冷せぬことなる

瘧の瘧を治すは肩脊を冷せぬことなる

瘧の瘧を治すは肩脊を冷せぬことなる













もし後してあつては、  
八重のふりかたは、  
さういふこと



あつては、  
さういふこと  
さういふこと  
さういふこと

けて死して、  
さういふこと  
さういふこと

であつて、  
さういふこと  
さういふこと

あつて、  
さういふこと  
さういふこと

捨つて、  
さういふこと  
さういふこと

さういふこと、  
さういふこと  
さういふこと

死んで、  
さういふこと  
さういふこと

さういふこと、  
さういふこと  
さういふこと

さういふこと、  
さういふこと  
さういふこと

さういふこと、  
さういふこと  
さういふこと

論曰、其人のうらみ、  
さういふこと  
さういふこと  
肺行心解





腎は火性にして一はほたて大腸少腸と腎行して

腎は火性にして一はほたて大腸少腸と腎行して

腎は火性にして一はほたて大腸少腸と腎行して

腎は火性にして一はほたて大腸少腸と腎行して

腎は火性にして一はほたて大腸少腸と腎行して

腎は火性にして一はほたて大腸少腸と腎行して

腎は火性にして一はほたて大腸少腸と腎行して

腎は火性にして一はほたて大腸少腸と腎行して

腎は火性にして一はほたて大腸少腸と腎行して

腎は火性にして一はほたて大腸少腸と腎行して

腎は火性にして一はほたて大腸少腸と腎行して

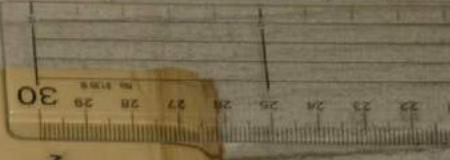
腎は火性にして一はほたて大腸少腸と腎行して

腎は火性にして一はほたて大腸少腸と腎行して

腎は火性にして一はほたて大腸少腸と腎行して

腎は火性にして一はほたて大腸少腸と腎行して





そんちちあ腕をひきめ指しをば裏の形海へ足にて  
自衛をりてゆくとゆい金のさび

又五臓の盛るれを行してととされても余はもて

源思鏡の目五神と守る一是五神と云ハ五臓を大

いけ守るべしと云

瘡を患るをさしよりゆけて是をのめれしむ

一瘡ハ骨の肉集り肩背へさゆ之字を瘡瘡を

し意と云血滯不行則瘡聚於鬲上而手足弱と

そ瘡カをさみ時ハ咳あれんくさつてさくしめひのこ

咽せあつてせさあれんくさつて瘡呼吸させさめらぬ

咳出成り又胸をさして免をさされをゆりしむあし



○胸のしひハ瘡をたれをさすをたれし

是る方會する治す○血棲椶實湯

- 一血棲仁○松實○陳皮○當飯○半夏○茶
- 一血棲仁○松實○陳皮○當飯○半夏○茶









并に子ぬぐふやうとてあづかうつるが聲のふも海

あまの娘をばよよ血めぐりて瘡にすすく

とてつゝと湯を流し流す



又あつた寸のふりやうく血

とくめられの瘡もさう入痛をあらざるやあま

一せんに死に全既世のまゝ成る是をのめれしむ

既世の何更に死をるす人と不富ありは中何更

よて傷もらひる不虫あぢうて死す命に何より

老虫の爲に害されし人の虫を殺す能不虫あり

す人の殺すりふは是ありし

一老年を成て何とあくわ食のまきり積る

命をもちあ妙ありはあつ食を成て久しを成て死

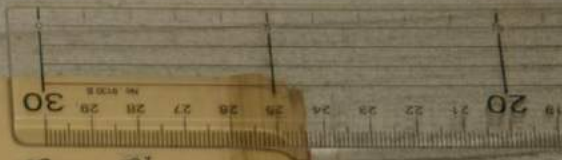
るわがはこれの病人の心をあがせしむる

あまの娘をばよよ血めぐりて瘡にすすく









野々次のの書のの序のに云く人ハ皆ハ虫也云々此ハ  
 有る是人のものなる病氣を云ふは人の心ハ虫也  
 此も亦人の心成り則古人の医書の毒を以て蛇虫と云ふ  
 毒也云々此ハ人の心成り則古人の医書の毒を以て蛇虫と云ふ  
 人の心成り則古人の医書の毒を以て蛇虫と云ふ  
 の文白ハ医書あり大人の文白云々○入門曰蛇虫長一  
 人ハ則者ハ貫命甚急云々○醫方集解曰若  
 飲食不慎血氣虛妄又能寢生と諸虫人虫と  
 改す云々則虫心且殺人○曰春曰白虫黒虫兼別  
 ハ者靈丹虫從後病難安又虫證甚急者云々云々  
 医書云々云々云々○萬病回春曰蛇虫ハ胃  
 中の濕熱人の腹中脾胃含うる虫を虫湯云々  
 有濕汚るるの湯之是と蛇虫云々云々云々  
 ハ食之あれらるる虫を湯之是腹の虫を云々云々





と凡そ医作違も足張うしし何れ也

既蟲名（カシラ）の形（カシラ）あれども多（カシラ）蛇刺（カシラ）し〜 蝮人（カシラ）は

さるものよく毒（カシラ）類（カシラ）のよくて幼孫（カシラ）子孫（カシラ）の候（カシラ）ふ

とく長（カシラ）者（カシラ）のよくて幼孫（カシラ）のよくて成長（カシラ）平（カシラ）いそ

も胸（カシラ）りく〜 命（カシラ）をふせすす〜 毒（カシラ）も急（カシラ）え〜 あして

大（カシラ）馬（カシラ）〜 又虫（カシラ）名（カシラ）八（カシラ）白（カシラ）幼孫（カシラ）て赤（カシラ）〜 ちんちん（カシラ）馬（カシラ）手（カシラ）

危（カシラ）なれを毒（カシラ）多（カシラ）あす 花（カシラ）白（カシラ）虫（カシラ）黒（カシラ）色（カシラ）葉（カシラ）〜 ちんちん馬（カシラ）手（カシラ）

ん〜 腹（カシラ）痛（カシラ）安（カシラ）ん〜 あ〜 油（カシラ）取（カシラ）ちんちん馬（カシラ）手（カシラ）

〜 ちんちん馬（カシラ）手（カシラ）〜 〇 屏（カシラ）の毒（カシラ）あ〜 今（カシラ）明（カシラ）と毒（カシラ）〜 ちんちん馬（カシラ）手（カシラ）

毒（カシラ）者（カシラ）成人（カシラ）〜 八（カシラ）死（カシラ）せ〜 ちんちん馬（カシラ）手（カシラ）〜 ちんちん馬（カシラ）手（カシラ）

〜 又虫（カシラ）名（カシラ）不吐（カシラ）もちんちん〜 是（カシラ）蛇（カシラ）虫（カシラ）の毒（カシラ）〜 ちんちん馬（カシラ）手（カシラ）

〜 ちんちん馬（カシラ）手（カシラ）〜 ちんちん馬（カシラ）手（カシラ）〜 ちんちん馬（カシラ）手（カシラ）

〜 ちんちん馬（カシラ）手（カシラ）〜 ちんちん馬（カシラ）手（カシラ）〜 ちんちん馬（カシラ）手（カシラ）

〜 ちんちん馬（カシラ）手（カシラ）〜 ちんちん馬（カシラ）手（カシラ）〜 ちんちん馬（カシラ）手（カシラ）

〜 ちんちん馬（カシラ）手（カシラ）〜 ちんちん馬（カシラ）手（カシラ）〜 ちんちん馬（カシラ）手（カシラ）

〜 ちんちん馬（カシラ）手（カシラ）〜 ちんちん馬（カシラ）手（カシラ）〜 ちんちん馬（カシラ）手（カシラ）

〜 ちんちん馬（カシラ）手（カシラ）〜 ちんちん馬（カシラ）手（カシラ）〜 ちんちん馬（カシラ）手（カシラ）

〜 ちんちん馬（カシラ）手（カシラ）〜 ちんちん馬（カシラ）手（カシラ）〜 ちんちん馬（カシラ）手（カシラ）







○通中湯 海人州楸月五分  
同苦練根皮楸月四分  
五分 夏楸月五分 茯苓楸月四分  
楸月四分 州楸月四分

石之葉ハ即て效方之  
此須之 調一 既中  
れかか

○消虫湯  
一便君子  
楸月五分 唐木香  
楸月五分 州楸月四分  
通中腹







をぬきしをひてその身を余をあやうく



新人のややくはまはるし  
ふしがえしを聞くとくはくは

満を二階の... 虫のついでに...



之、何れ家の... 女中のついでに...

女中のついでに...

... 虫のついでに...

... 虫のついでに...

... 虫のついでに...

... 虫のついでに...

... 虫のついでに...

... 虫のついでに...

... 虫のついでに...



かて華あるを多きオ、種不食して身は枯れわごと  
や正氣をくすくす死すまらう一病がけを是をみる  
病致細是久しそ不食命折塵しく多故に脂を足  
多し下りまらうこぼしつゝのまらう成るは有親族  
の口をくく塊をもえや使わくしと云所の是既  
申す可きハ、病を治るんと則使君子みく  
一消虫湯を夫れくこしと申すハ、二腹に積虫を

二日たきあして下りのまらう成て正氣を成  
成る海人村の遠田湯を二腹もちつて初き虫大便七  
ツもちて少くしつゝのまらう成てものを喰べしとす  
く食を食あして使わくは病人脱虫を左に死す  
星をいふをこれと見くすして虫の湯を害するを多し  
又市の邊に七ツを少の老人をいふまらうの食をい  
げ病を治るは、医師食をいふと病を治るは、



うくを食す心多く一節是をんを 脈ちつひし  
この脈之脈をん多く心も脈のふくしつし一たふあし  
とあまふ多のふし一是人の脈をのふくしつし一何も節は  
りて違由湯との海せし一虫のちあ一て脈のふくし  
虫の脈のふくしつし一する葉ハ虫のけしつしする虫くる  
しつしつし一虫の脈のふくしつし一つしつしつしつし  
この脈すしつしつしつしつしつしつしつしつしつし  
らて終つしつしつしつしつしつしつしつしつしつし  
是虫の爲害せられし一○人虫を殺す能わ虫のあふす  
人を殺すつしつしつしつしつしつしつしつしつしつし  
多たふと積瘕つしつしつしつしつしつしつしつしつしつし  
て久しつしつしつしつしつしつしつしつしつしつしつし  
先づつしつしつしつしつしつしつしつしつしつしつしつし  
虫皆てヶ根成之○此をよめつしつしつしつしつしつしつし

















一若くもあつて蛇虫ハゆめあつた毒入るれとらんは急

二人を害す多のを多うて早急の人何のけあきこころは

是も亦義の進虫湯のつこころを虫こころ大便ふ

あつたり是れは是をあらす於をすちた久くを成て虫を

採てゆめハふあく害あふ一若くも毒入るれとらんは

腸を虫湯てぬハゆめ害す多をあらす一思こころは

ゆめはゆめ進虫湯ともちぬれをあらす一あしゆめは

一若くもあつて蛇虫ハゆめあつた毒入るれとらんは急

是れはゆめはゆめ進虫湯ともちぬれをあらす一あしゆめは

ゆめはゆめ進虫湯ともちぬれをあらす一あしゆめは

ゆめはゆめ進虫湯ともちぬれをあらす一あしゆめは

一進虫湯の進虫湯の大人男女若二あるゆめは

ゆめはゆめ進虫湯ともちぬれをあらす一あしゆめは

ゆめはゆめ進虫湯ともちぬれをあらす一あしゆめは



跋語上醫及國具次  
醫人予友井子兼者  
醫通於四家技傍習  
儒術常歎世醫賣名  
鈞利無執其實於是  
發憤著書其意欲補  
於未萌今世四海昇  
平之化朝無斥位野  
無遺賢仁布子黎庶  
澤遍千宇內是子兼  
所以不閑係字醫國  
也書成也跋於吊乃  
錄斯言云



寬政丁巳閏月良辰

株筆須則堂

板都

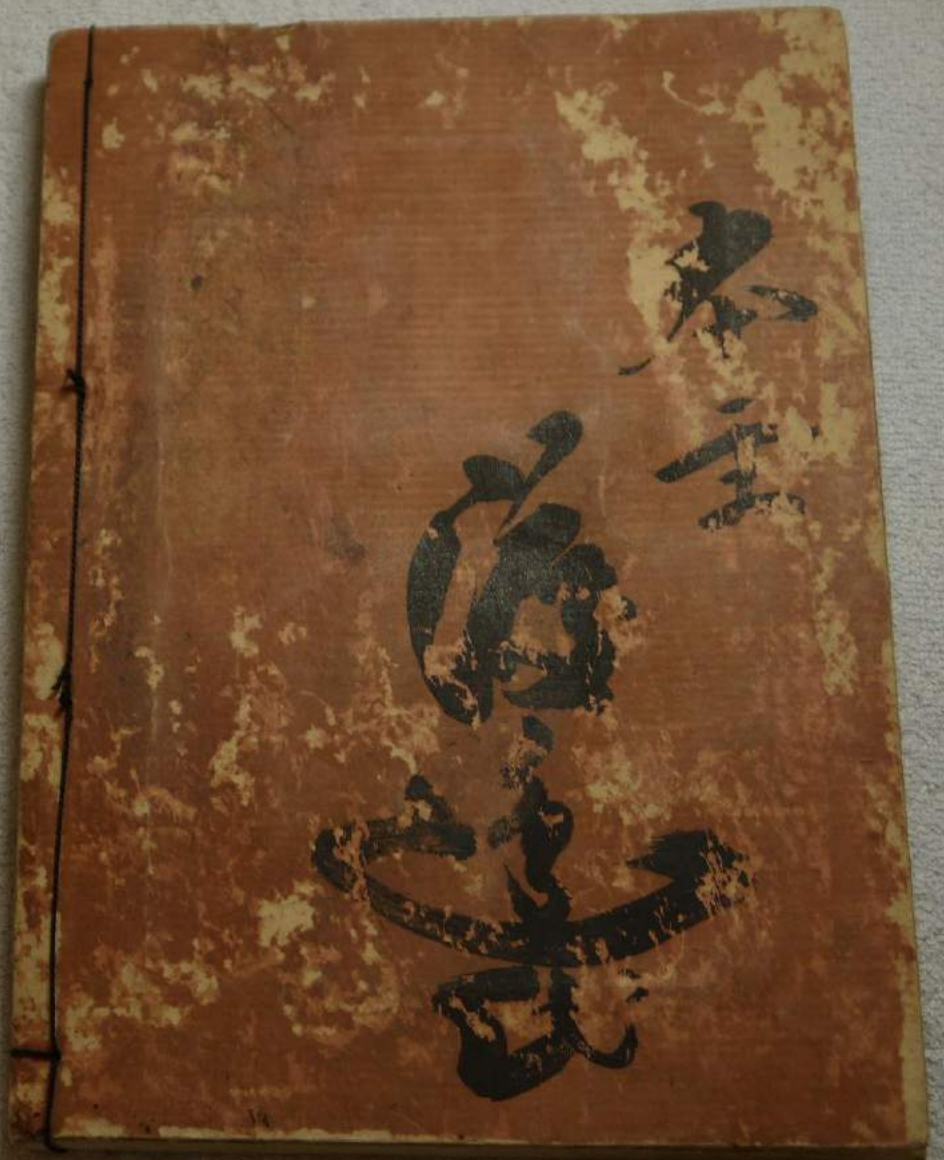
桑原政繁

藥能書

讀易九龜中横町

渡邊氏





本草綱目  
卷之五